

岡崎の今昔 ～岡崎の空は青かった～

志賀為株式会社
代表取締役相談役 志賀為利



本日は、こんなに大勢の方がお集まり頂きまして、大変光栄に存じます。私、先日万葉集の関係の本を読んでおりましたら、当時の万葉の都、平城京の人口は確か20万人程であったと書いてございました。そしてこの平城京の都の官司の給料と言いますと、例えば従二位の相伴旅人、この人の年収は1億2,500万円、そしてこの位の従三位の相伴家持、この人の年収は7,500万円と書いてございました。そして彼らは大変良い年収を得ておったわけですが、当時の平城京の町中には乞食とか野盗というのが横行しておりまして、この平城京の都というのは要するに貧富の差の激しかった社会であったなということが伺えるわけでございます。

冒頭からちょっと話が横道に逸れましたが、私は本日の講座を務めさせて頂き、先程紹介頂きました、志賀為利でございます。実は先日、商工会議所の方が来られまして、お前物書きもやっているようだからひとつ岡崎の今昔について、何か話すことはないかと申されまして、それではと考えましたのは、私が今更、喋喋喃喃、岡崎の現代のことを語るまでもなく、今日ここにお集まりの皆さん方が日々現体験として肌で感じてみえる岡崎のことでございますので、これもまた私の申し上げることではなからうと思うわけでございます。そしてまた遠い戦国時代とかあるいは江戸時代、これらのことにつきましてもこの講座で既に偉い先生方が大勢度々お話になってみえると聞いておりますので、これも私のお話する範疇じゃないと思います。そうしまして、私は只今ご紹介にありましたように、大正14年生まれで当年83歳でございます。従いまして私のお話し申し上げたいと思いますのは、この私の現体験として記憶に残っております昭和の初期、そして私の先程ご紹介頂きました旧制岡崎中学時代、そして更に大学時代から軍の学校へ入りますまでのいわゆる空襲で焼ける前の岡崎について一言お話してみたいと思うわけでございます。

1. 当時、岡崎南部は日本一の菜種の産地 一面が黄色い海だった

私の生まれましたのは、岡崎の南部の旧碧海郡六ツ美村でございます。その当時の印象として私は子ども心にまぶたに焼き付いておりますのは、当時の六ツ美というのは春になりますと見渡す限り菜種の黄色い海のごようございました。そして春4月に羽角の弘法さんの縁日があります。その縁日の時に羽角山の頂上から眺めました、下界の六ツ美というのは本当に今申しましたように黄色の海のごようございました。そして丁度東北の松島のごように六ツ美の集落、黄色い海の中に六ツ美の集落が点々と緑色に、島のごように浮かび上がっております。素晴らしい景色で、これは私どもの未だに目の中から消えない景色であります。そして西の方の空を見ますと、ちょうど依佐美の無線塔が春霞の中に浮き上がって見えました。そして更に北の方を見ますと、秋から冬にかけまし

ては、あの雪の銀嶺の木曾の御嶽山が本当に宝石かダイヤモンドのように輝いて見えました。それからその左手前には緑色の猿投山、右手の方遠くには三河富士と言われます、いわゆる村積山、そして更に南へ下りますと六所山、その奥には炮烙山、それからずっとまた南へ参りますと真東には遠望峰山、その南には先程申しました羽角山、そのまた南には夏のかぎ万燈で有名な長円寺山、真南には西尾市にございます浅井山、その向こうに雲母で有名なハツ面山があります。こうした三河の重畳たる山並みの、西に果てたところがいわゆる矢作川水系の岡崎平野でございまして、その平野を南北に貫流しておりますのは、我々の母なる川のいわゆる矢作川でございます。この素晴らしい写景というものは、私どもの先祖でございました三河武士が度々の合戦の行き帰りにこの写景を見て、自らの武運を祈ったであろうと思います。この素晴らしい三河に生まれ、まほろばの土地の岡崎に育ったことを私は限りない誇りに思っております。

そして私どもの生まれました当時のいわゆる大正末期から昭和にかけましては、皆さんご存知のように第一次世界大戦が終わった後でございまして、いわゆる当時の世界恐慌、只今の日本の厳しい経済環境と同じでございまして、第一次世界大戦後の世界恐慌の真っ只中でございました。いわゆる昭和の恐慌でございましてね。また農村は農村で農村恐慌の真っ只中。その当時よく記憶がありますのは、お袋と支配人の萩原さんという人が帳場で額を集めてごそごそなにやら喋っているわけ。子ども心に聞いていますと、それは昨日どこそこの村の誰々さん一家が夜逃げしてしまっただけ。また夜は夜で書齋に電気がついております。ふと見ると親父が一生懸命に書類を読んでいる。というのは当時経済恐慌の真っ只中でございまして、岡崎の市内にありました当時の額田銀行、あるいは尾三銀行、あるいは大野銀行、こうした銀行がとんどんと倒産してございました。その当時親父が確か尾三銀行だと思っておりますが、尾三銀行の預金者総代で当時の整理の預金者の代表として折衝してございました。こうして本当に大変な時代でございました。

その当時、大変な農村恐慌の真っ只中でございましたが、当時の安城は日本デンマークとして栄えておったわけでもございましたが、日本デンマークの安城と日本一の菜種を誇りました六ツ美、このふたつの町村が辛うじて厳しい中にも救われておったのでございます。当時、自力更生という言葉が旗印に掲げまして、六ツ美の村立農業補習学校、ここに勤務しておられました幸田町野崎の本田桂先生、そしてまた太田幸平先生、こうしたお二方の菜種のオーソリティーの方が菜種の指導をしておられました。当時昭和の初め頃でございました、時の昭和天皇の弟宮さんの高松宮殿下が日本一の六ツ美菜種のご視察に見えました。続いて翌年に内務大臣であられました床次さんもご視察に来られました。私の記憶にありますのは、高松宮殿下がお見えになった時に花火が上がったのを子ども心に記憶しております。こうした日本一の菜種を対象に、只今、岡崎商工会議所の副会頭をやっておられます、太田油脂さん。太田油脂さんはこの六ツ美の菜種を対象にして、菜種油の太田油脂として業績を拡張されたと聞いております。

2. 愛知県には5つの市しかなかった 豊田市も人口2万人位の拳母町

また、当時の岡崎の人口と言いますのは、確か7万人であったと思います。そしてそ

の時の市長は菅野経三郎さん。何だ、たった7万人の人口ということでございますが、当時の岡崎市というのは只今のこの広域都市でなくて、岩津とか常磐村、あるいは河合村、あるいは先般合併しました額田町の4村ですな。それから本宿、さらに山中、藤川、竜谷、福岡、六ツ美、矢作、こういう地域はいわゆるまだ郡部でございまして、岡崎市に合併しておりませんでした。そしてその当時、今ご承知のように、ひとくちに岡崎と言いますのは、いわゆる旧岡崎市を言うのでありまして、その当時には確か愛知県には市というのは5つしか無かったように記憶しております。まず、名古屋市。これは人口90万人から110万人、120万人と支那事変の発展と共に軍事工場の進出によって人口が鰻登りに増えておりました。そして東の豊橋市、これは人口確か8万人前後だと思えます。そしてまたこの西三河の岡崎市、更に西へ参りますと尾張の一宮。これは人口確か7万人弱であったと聞いております。それから同じように尾張の瀬戸市。これは人口4万人強のように記憶しております。そして岡崎の場合、すぐお隣りが豊田でございまして、只今人口41万人を誇る大豊田市でございまして、当時の豊田市は僅々人口2万人前後のいわゆる拳母町であったわけでありまして。この拳母町というのは三河線の拳母という駅がありまして、その駅の裏の西側というのはもう家は1軒も無くて、ほとんど田んぼばかりでした。そして拳母の駅からずっと東の方に、矢作川の堤防の下まで町並みが続いていまして、まあ僅々400メートル、500メートルの町並みだと思えますが、それは只今あります昭和町、あるいは久保町、あるいは西町、こうしたひと叢の町並、そして飛び地として上拳母の金谷、長興寺、また北の方にあります樹木、こうした集落があったに過ぎません。それでその当時の拳母の主たる産業としては、繭の集産地であったわけでありまして。工場としましては、木下さんの加茂製糸さん、そしてようやく論地ヶ原に工場の始動が始まったばかりのトヨタ自動車さんの一企業があったに過ぎません。

3. 岡崎は県東部三河の行政 / 経済 / 教育の中心地だった

そして当時よく新聞などで西三河1市5郡とか、あるいは東三河1市5郡という言葉が盛んに新聞に出ておりました。と申しますのは西三河1市5郡というのは、言わずもがな岡崎市、額田郡、幡豆郡、碧海郡、東西加茂郡ですな。東三河1市5郡というのは、豊橋市に南北設楽郡に、八名郡に宝飯郡、そして渥美郡。まあ、こうした郡でございまして、当時新聞で良く出ましたのは西三河1市5郡を対象に防空演習があったとか。あるいは東三河1市5郡を対象に防空演習があった。これは支那事変が始まった当初でございまして。こうしてまた西三河1市5郡の中等学校を対象にした総合運動会が、運動会というか体育祭ですな、体育祭が岡崎公園のグラウンドであったのを新聞で良く見ました。

そうしてひとくちに岡崎と言いますのは今でもそうですが、いわゆる芦池橋から北の都市区画を岡崎というようでありまして、この芦池橋から南の方は、当時は暇になっておりました。その暇の中を市電の通りがずっとありまして、その市電の通りの両脇に大きなポプラの並木が30~40本くらいありましたか。亭亭とそびえ立っている。そしてこのポプラの並木の間から西の方を見ますと、ちょうど矢作川の鉄橋にかかるスロー

ブを蒸気機関車が喘ぎ喘ぎ黒煙をあげながら登っていく様子が良く見えました。これは尾崎士郎先生のお書きになりました「人生劇場」の青春篇に出てくるシーンそのものであったんですけど。そして只今の警察署のありますところ、あの辺りは低い田んぼでございました。その田んぼがずっと西の方に伸びておりまして、只今申しました市電の通り、ポプラ並木を越えて更にずっと西の方に、六名の集落まで続いておりました。警察署の辺りの低い田んぼに虻がよくおりました。そして当時の岡崎中学のわんぱく小僧は、その虻退治だと言ってよく田んぼに行つて虻退治をやりましたが、虻はあまり居りませんでした。

それで今申しました警察署の前の坂道、これはいわゆる昔の、只今もそうですけれども、昔の岡崎中学の通学道路でございまして、三谷とか蒲郡、あるいは安城の方から来ます汽車通学。あるいは私どものように南部の郡部から通う自転車通学。あるいは市内の南から徒歩の通学。こうした生徒の通学道路であったんです。それでこの通学道路をずっと坂を下つて市電の通りに突き当たったところが、いわゆる市電の車庫がありまして、車庫前という電停がありました。その車庫前の電停の少し北へ行つたところ、要するにポプラ並木の南の外れのところに、我々当時の岡崎中学やあるいは岡崎商業の生徒のあこがれの店があったんです。そのあこがれの店というのは、決して可愛いメツチェン(娘)が居つたわけじゃありません。これは当時の我々少年の食欲を満たすあんまき屋があったんです。このあんまき屋と言うのは青い暖簾がこう、ひらめいておつて、もう本当に空腹で授業を終わつて帰つて来る時には、まあ耐えられない魅力でありました。その当時の中等学校は父兄の同伴のない飲食店の出入りというのは厳禁をされておりました。これを犯すと当時、教護連盟というのがありまして、すぐ捕まつて学校等に通報されるわけです。そうされるとえらいことで、えらい処罰をくうわけです。またそれよりも怖かったのは、私には2年上の兄貴がおりました。彼は当時副級長をやつてまして模範生徒であったわけです。従いまして模範生徒の兄貴にあんまきを買つて食べたなんて見つかり、すぐに家に帰つてお袋に通報されます。そうしますと翌月の小遣いが明らかに減給になつちゃう。これが辛いから我慢しておるわけです。その兄貴よりも更に怖かったのは上級生のいわゆる説法でございましてね。説法というのは、そういうあんまき屋なんか立ち入つてるのが見つかり、その場でビンタを食らいます。それ以上に怖いのは、「おいお前2年生や3年生の分際で、学校帰りにあんまきを食うなんて何事だ。明日お昼時間に5年甲組の教室に来い」と。そういう命令を受けて翌日のお昼休みに行きますと、ニキビだらけの髭の生えかかった硬派の5年生甲組の生徒がたむろしてまして、その円陣の中に入る。入りますといきなりビンタをバン。「お前2年、3年生の若造のくせに帰りにあんまき食うなんてもつてのほかだ」と、ビンタを食うわけです。「やれやれ、これは大変だな」と思つて、まあやつとそこを逃れて来るわけですが、しかしそうした兄貴や上級生のビンタの怖さを越えて、且つ尚魅力があったのは当時のあんまきであります。まずその為には友人を一人、「おい、お前電車路のところで兄貴や上級者が来るのを番しとれ。」と番をさせておく。私は大急ぎであんまき屋の暖簾をくぐつてあんまき屋に入ります。そうすると鉢巻をしたあんまき屋の小父さんは

ちゃんと心得たもので、パッパッパッと竹の皮に包んだあんまきをくれます。それをポケットにねじ込み、一目散に友達と戸崎の郷中を抜けて、西の田んぼの真ん中に行きます。そしたらそこには稲叢と言うんですが、すゞみがありまして、そのすゞみの日当たりの良いところで友達と3人ばかりであんまきを食うわけです。その時のあんまきの美味さというのは、ちょうど王侯貴族の晩餐よりもっと美味しかった記憶がございます。その当時のあんまきというのは、確か5銭で2本。5円じゃないですよ、5銭ですよ。5銭で2本。その後1本3銭ぐらいになったような記憶がございますね。

4. 東濃地方の東京 / 横浜へ出る玄関口は羽根の駅

そうしまして、この岡崎中学、今の岡高の通学道路の警察署前の道、これからいわゆる戸崎から南というのは、先程言いましたように岡崎の南部でございます。この南部というのは言うなれば先程も申しましたが、アメリカの西部劇に出てくる、いわゆる岡崎市の未開発の部分でありますね。だから私は南部ということを知るとあまり気持ち良い気がしません。そのいわゆる南部の中心は兎にも角にも羽根町であるわけです。

この羽根というのはいわゆる行政区画における羽根町を言うのではなくて、羽根町に柱町、針崎町、この一群のゾーンをいわゆる郡部の人、世間の人には羽根と言うわけでございます。例えばちなみに中選挙区の頃に猿投の四郷出身の浦野幸男先生、この先生はお話の中で度々羽根の駅、羽根の駅という言葉が使われました。また、私どもの会社で長い間顧問弁護士をやって頂きました大内正夫先生。この先生は確か岐阜県の東濃の明智か岩村、あるいは上矢作の出身の方でございましたが、この先生もおっしゃいますには、「東濃の人は、例えば東京や横浜などの東へ行く場合には必ずこの羽根の駅から汽車に乗ったもんだ」と、こうおっしゃいました。まさかと思って聞きますと、「いや、そうなんだ」と。当時の金銭感覚から言いますと、時間というのは只なんだと。だから1日や2日余分にかかっても現実にポケットから出すお金が少なければそれで得なんだと、というのが当時の経済感覚であつたんでございます。そして先生がおっしゃるには、先生は当時昭和2、3年の頃だと思いますが、早稲田大学の学生さんとして、長い夏休みや春休みが終わった後、帰京するのに、朝早く暗いうちに東濃の村を出られまして、トランク1個下げてテクテク1時間半か2時間掛かって山道を、矢作川の岸まで歩いて来られます。それで歩き疲れて着かれたのは、いわゆる上矢作か、あるいは小渡、あるいは笹戸の土場であったと聞きました。その土場には三河松や、あるいは杉丸太、あるいは竹の筏がもやっております、その筏へ船頭さんに頼んで乗せてもらって1日かかりで矢作川を下り、そして夕方、陽の入った頃に矢作橋のたもとの岡崎の土場に着かれるわけです。それから歩いて徒歩で康生の停留所へ行く。その着いた康生の停留所のあたりは本当に賑やかで、人も車も満員だったと。さすがにここは三河一の都会だなとじみじみ思ったということをおっしゃいました。

5. 岡崎と羽根 「おかざきへ行く」

そしてまた、今年の夏の7月でございましたですかね、私がJR駅前の会社の前の道

で立っておりますと、顔見知りのおばさんが日傘をさして暑い日なたを歩いて来られます。「おばさん、この暑いのにどこへお出かけです」と言いましたら、おばさんは「岡崎へ行って来る。」「岡崎っておばさんここも岡崎市じゃないかネ」と言ったら、「いや、ここは違う、ここは羽根だ」と。ああなるほど、ここは羽根なんだな。羽根というのはやっぱり岡崎市の中にあっても、ひとつの独立した文化と独立した経済圏を確立しているゾーンだということをしみじみその時に感じました。

先程申しましたように、明らかに東濃の方の東京、横浜に行かれる汽車の駅というのは羽根の駅であったわけであります。そしてこの羽根の町というのは、先生がおっしゃいましたのは、市電を降りて駅前の広場を東の路地へ入っていく。そうしますと、あちらこちらから三味線の音が響いてくる。そして三々五々、綺麗に着飾った芸妓さんがお座敷に行かれる。「ああ、いいなあ。」と、まあ若い男心に炎を燃やしたとおっしゃいました。そしてお泊まりになったのは、確か鈴木屋旅館さんか発知さんの伊勢屋さん、あるいは松本旅館さんであったと聞きました。そして明るく日、朝一番で汽車、上り列車に乗って東京へお帰りになったと聞きました。このように当時、羽根には芸妓さんの羽柱連という検番がございまして、私の記憶では20～30人芸妓さんが居られたような気がします。もう素晴らしい町でございましたね。

そしてまた羽根というのは先程言いましたように独立した文化を持ってあったわけですが、その最たるものは、この羽根には競馬場があったということでございますね。この競馬場というのはふたつありまして、ひとつは草競馬、これは岡崎周辺の荷馬車の輓馬の関係の競馬場でした。それから本競馬、県営の競馬場というのは、つい先年まで倉田産業さんの工場のありました、羽根の大競馬場。この競馬場は真ん中に小さな池がありまして、その池の周囲が馬場になってる。その馬場をまた取り巻くように高い小高い台地がありまして、その台地の上にはベボウやら小松が生えています。その松の根方で腰を降ろして見るわけで。当時テレビもありませんし、ましてゲームセンター等、無かった当時、私ども郡部の六ツ美の子ども達は、競馬があるというともう楽しくて、朝早くお袋におにぎりを作ってもらって腰にぶら下げて、とぼとぼ歩いて競馬を見に行きました。そして1時間に1本、いっぺん走る馬の競走に歓声をあげて見たものであります。そしてその競馬を終わって帰り道、羽根の駅まで来まして、口が渴いていたので、当時ラムネを買って友達とふたりで分けて飲んだ記憶がございます。そしてまたこの競馬のある前日には全国から競馬のファンが集まって来られまして、それ前祝いだと言って芸妓さんをあげてドンチャン騒ぎをする。そしてまた競馬の終わった日の夕方は、もう馬券で儲かったと言って、これまた芸妓さんをあげてドンチャン騒ぎで騒ぐ。更に馬券ですってしまったと言ってやけ酒だって酒を飲む。こうして確かに羽根の文化というのは競馬場あった時は羽根の潤い、町の潤いになったということは間違いありません。

6. 岡崎の繁栄を支えた業界と人 駅頭で時刻表を見入っていた少女

それから当時岡崎の町の賑やかさ、町の殷賑を支えたものに、当時の岡崎の繊維の関

係の工場に働かれる若い女工さん。只今の言葉で言うと、若い女工員さん、こうした人達の力が預かり功あったということを申し上げておきます。と申しますのは、当時三河に三龍社ありと言われる三龍社さんの本社工場、六名工場、そして矢作工場、更に大平工場、また羽根の針崎工場、更に西尾の平坂工場、そして製糸工場の関係では丹羽製糸さん、矢作の。そして羽根の陣場の衣ヶ浦製糸さん。さらに中島の杉浦製糸さん。まあこうした製糸工場。更に綿紡の日清紡三社。まず戸崎工場さん、針崎工場さん、それから美合工場さん。この美合工場さんは綿紡じゃなく、当時新進のレーヨン、いわゆる人絹の工場だったと思います。それから同じように日名のユニチカさん、当時は日本レーヨンと申しました。この日本レーヨンさんには高い2本の煙突がありました。この煙突というのはちょうど支那事变始まった当時でございます、三重県の嬉野の飛行場から東の方に飛行するのに飛び立ちますと、まず最初に伊勢湾上で目印になりますのは刈谷の依佐美の無線塔であります。それで飛行機が知多半島の上空に来ますと、次の目標というのはこの日名の日本レーヨンさんの2本の高い煙突でした。このふたつの、目で見える目標を目指し、東へ飛行したと。当時はレーダーによる飛行ではなくて、目で見える操縦ですね、これらの目印が大変役に立ったということを聞いております。また当時、戦後もありましたが、四日市の石原産業さんの高い煙突。そしてユニチカさんのふたつの煙突、これはこの当時東海地区において1番高い工造物。もちろん依佐美の無線塔ありましたが、そういうふうに聞いております。

そしてまた話は元に戻りますが、こうしたその他に岡崎にはいわゆる三河木綿の工場として柱の深田さんがおやりになった三河職産さん。あるいは信州から来られました臥雲辰致さんですか、この方の指導されましたガラ紡。このガラ紡というのは皆さんよくご存知のように、岡崎の東北山間部の谷川には直径4メートルぐらいの水車がガラガラガラガラ回っておったのを記憶しております。こうした、いわゆる繊維の工場に働かれる大勢の若い工員さん。若い女の工員さん、この方達が夏の夕方浴衣をきて、揃いの赤い三尺を締めて、手に手にうちわを持って岡崎の町を夕方散策しておられました。また、ある時私が東京から来ます大学の友人を羽根の駅の待合所で待って居ますと、年の頃なら12、13歳の若いまだ童顔の消えない娘さんが黙って立ったまま、じっと時刻表を見入っておられました。どうしたんだろうなと思ってふと見ますと、その娘さんの目には涙がにじんでいる。「ああ、この娘さんはどこか遠い所からこの羽根周辺の繊維の工場に働きに来ているんだろうな」と、そう思った時に私は胸が詰まる思いをしました。こうした若い工員さんに支えられて、岡崎の町の賑わいはあったわけではありますが、こうした女工さんの街中に落とされるお給金というものはごく些少なものであったかもしれません。しかし、少なくとも岡崎の町を彩り、岡崎の町の殷賑を支えたのはこうした若い女の工員さんの姿であつたらうと私は思います。

それともうひとつこの三龍社さんの田口さん。昔昭和初期、日本の製糸王言われた片倉製糸の片倉直人さん、この方は東京の神田の駿河台に住んでおられました。私共の父親も若い頃大変ご指導を仰いだ方でございますが、駿河台のお屋敷をお伺いすると、よく親父におっしゃったのは、「俺はな、日本の製糸業界に怖い者は居らんが、ただ三

河の三龍社だけは手強い。」こういうことをおっしゃって居られましたとか、三龍社さんは立派な会社だったんだなど。

7. 康生通りのネオンは銀座のそれより眩しかった

尚、先程言いましたように岡崎というのは、いわゆる芦池橋から北の方の町場を言うのでございまして、そこにありましたのは康生通り、あるいは伝馬通り、あるいは連尺通り、あるいは本町通り、こうしたところには素晴らしいお店がいっぱいありました。例えば呉服屋さん、あるいは菓子屋さん、あるいは紙屋さん。連尺通りには日用雑貨のお店、文房具屋さん。また本屋さん、こうしたお店が本当に軒を並べておりまして、中でも呉服の山沢屋さん。そして千賀さんのカネダイ大島屋さん、これらのお店というのは、この呉服屋さんというのはマーケットとして、新城や豊川、蒲郡あるいは西尾、一色、大浜、刈谷、知立、安城、さらに拳母、そして足助、こうしたオール三河に販路を持っておられました。当時卸業は別としまして、ユーザーに直接に結びつく小売業としてこれだけの販路を持っておられたというのは、私の思いではデパートの松坂屋さんの呉服部にも匹敵するんじゃないかという気が致します。事程左称に康生、本町、連尺の商店というのは立派なものでございまして、そして私が小学校の頃、東京に居ります従兄弟が夏休みにやってまいりまして、夕方康生へ連れて行きました。そうしたらその従兄弟が康生のネオンを見て、「このネオンは素晴らしい。銀座のネオンより凄いよ」とこう言いました。「まさか銀座のネオンより凄いなんでどうということだ」と言いましたら、それは当時の康生通りというのは只今と違ひまして、只今の道巾の半分しかありません。狭い道路です。その狭い道路にぎっしりと商店が列んでおって、もう入り交うようにネオンが輝いている。これは当時の銀座のネオンよりも華やかに見えただろうということだろうと思います。

8. 岡崎の教育 / 学校について

そしてひとつ、私この岡崎の教育、学校関係の事についてちょっと申し上げたいと思います。当時、戦前愛知県にはいわゆる高等専門校といいますが、只今の名古屋大学の前身であります名古屋帝国大学、その前の名古屋医科大学、そして名古屋大学の経済学部になりました名古屋高等商業、そして名古屋工業大学の前身の名古屋高等工業学校、更に鳴海にありました名古屋薬学専門学校、名古屋市立大学の前身、真宗専門学校、そして戦後愛知教育大学になりました刈谷の井ヶ谷ですか、ここにあります当時の愛知学芸大学、これは皆さんがご存知のように当時の愛知県の教育界を二分しました、いわゆる名古屋の第一師範学校、また岡崎の第二師範学校による対立。この岡崎の第二師範と言いますのは、只今の教育大学の付属養護学校のところにありました。また只今、明大寺の山の上にあります、旧制の岡崎中学、この旧制の岡崎中学について、一番思い出しますのは、当時岡崎中学の校庭の北のちょっと高い校舎の前のところに大きな石碑が建ってありました。この石碑というのは天皇陛下御駐在の所というような字が書いてありました。これは昭和2年に当時陸軍の大演習が愛知県下で行われました。その時、その

後に昭和天皇が岡崎中学に来られまして、当時の西三河の各中等学校と在郷軍人を集めて閲兵分列式がありました。それを記念しまして当時の岡崎市は、毎年11月21日になりますと、必ず岡崎市内の全中等学校、生徒を集めて閲兵分列の記念式典がありました。また更に岡崎中学には毎月21日にはこれを記念して全校生徒の行軍がありました。まあ、5年生は良いですが、1年生、2年生には、8時間歩かされるというのは大変な重荷でございました。そして次に只今菅生川の川岸にあります、朝日町の岡崎商業、あれは当時只今の芦池橋のところにあります愛知教育大学の附属中学ですか、ここに当時ありましたが、商業学校は戦争末期に岡崎の高等女学校と合併して、確か女学校の方へ行ったと思います。それから次に、羽根の服部工業の服部太郎吉さんが作られました岡崎工業学校、これは当時より羽根の陣場にありました。それから次いで岡崎高等女学校。これは只今の岡崎の市民会館のあるところにありまして、今建っています甲山会館はその女学校の確か講堂の後に建ったものだと記憶しております。それから更に白井こう先生のお建てになりました岡崎家政女学校、昔は岡崎裁縫女学校と言っておられましたが、この学校は今と同じように稲熊と言いますか、梅園のモダン通りのところにあります。それから更に、あの岡崎高等女学校は北高になって今稲熊にございますね。それから当時開校したばかりの、只今の岩津高校、当時は岩津農商という名前で発祥しておられました。

更にまた私どもの岡崎中学の時のことですが、私どもが入学しました当時は、岡崎中学は私どもの1年上級生までは150人の3クラスでした。私どもの時から4クラス200人になりました。それでこの岡中に入って来ます小学校と言いますと、当時、その前にちょっと申し上げますが、私、不思議に思っておりますのは、岡崎というところは変わっているなあと。と申しますのは普通小学校の名前を言います場合には、三島小学校だとか、あるいは梅園小学校、例えば郡部の場合では、私の場合は六ツ美第一小学校、あるいは桜井第二小学校、あるいは安城第四小学校、小の字を付けて読みますが、岡崎の場合は小の字を抜いて梅園学校だとか連尺学校だとか、岡崎学校とかこういう呼び方をします。それで私、岡中に入ってくる時に変わった言い方だなと思いました。当時先程申しましたように、1クラス50人で一学年が200人、150人。この中にこれらの附属小学校とかあるいは梅園小学校、あるいは連尺、岡崎小学校、こういうところの卒業生というのは大体200人、150人の中に10人以上の出身者が居りました。私ども郡部の学校では辛うじて一つの小学校から一人か二人、中には一人も来ない学校もあります。ことごとく左様に岡崎市内の学校は素晴らしい小学校が多かったわけです。

また、私が岡中2年生の時でした。植物の授業で鳥沢貫一先生がおっしゃいましたのは、「お前らの1年上に素晴らしい生徒が居るんだぞ。」この生徒は行軍や遠足で田舎の道を歩いておると、「おい、君この草は何という草だ？おい、あそこにある木は何という木だ？」と先生が聞きますとどんな草でもどんな木でもすぐに答える生徒が居りました。これは後ほど文化勲章を貰いました木村資生さんでございます。そしてこの木村資生さんは文化勲章を取られてまもなく亡くなりましたが、この方が今日まで生きてお

られましたら、間違いなくノーベル賞を貰われた方であると思います。

それから当時岡崎の地はいわゆる野球王国でございまして、昭和11年でございましたが、私どもの1年上には大沢さんと言いまして、この人は連尺小学校ですが、この大沢さんの率いる連尺小学校は、当時愛知県の小学校の少年野球で見事優勝しました。この時の岡崎市の模様が大変でして、ラジオ屋さんというラジオさんは黒山の様でした。またそれに通じて岡崎中学の野球の黄金時代というのがあります。これは当時岡中の野球部を率いておりましたのは、高塚さんと佐藤さん。このふたりのバッテリーが当時甲子園で優勝するよりも、野球王国愛知県で優勝する方が難しいと言われた当時、強豪、中京商業相手にして見事優勝して東海地区で覇者になりました。また同じように戦争の末期でございまして、弁護士で代議士をやられました永田安太郎先生。この方の娘婿さんであります、永田亘さん。当時、杉田亘さんで、この方が率います野球部はいわゆる私どもの同級生であります近藤貞雄君、そして打撃王になりました杉山悟君。また先程の連尺小学校出身の大沢さん、これらの優秀な選手を孕いて鳴海球場で善戦しましたが、この時は優勝することが出来ませんでした。事程左称に当時の岡崎は野球王国でありまして、こうした時には岡崎のラジオ屋さんというのは、当時はテレビはありませんで、野球の実況放送というのはラジオ屋さんしかない。本当にラジオ屋さんは黒山のよくな人ばかりだったと記憶しております。

また、岡崎には立派な学者が大勢輩出しておりまして、世界的地理学者の志賀重昂、これは私の遠縁になりますが、鉄の本多光太郎先生、また構造力学の鷹部屋福平先生、この先生は九州大学と北海道大学で教鞭をとっておられました。そして先程の木村資生さん、こうした素晴らしい学者が輩出されている。まだ色々申し上げたいこともございまして、ぼちぼち時間でございますので、この辺で終わりにしたいと思います。

私の思い出しますのは、この岡崎というのは、岡崎という町の近代を区分けするには、いわゆる市電のあった前となくなった後、と言いますのは昭和37年市内電車が撤去になっておりますが、この市内電車のあった前と市内電車が撤去された後の岡崎というのは、ふたつに区分して考えられます。これは少なくとも町の景観から来たものでございます。その当時の岡崎の空は本当に青うございました。これは只今のように二酸化炭素がなかったというわけではなく、いわゆる岡崎の町の人情が厚かったということであろうかと思えます。長時間ありがとうございました。

ご質問が御座居まして、急遽お答えしました。

岡崎高等師範学校につきまして、当時、戦前日本には中等学校教職養成の高等師範学校と言うのは、東京と広島のみしかありませんでした。それが戦争末期、岡崎にも誘致設立されました。芦池橋の商業学校（只今の付属中学校の処）が女学校と合併し、その地にできましたが、岡崎の空襲で焼け出され、戦後、豊川の海軍工廠の中に移設され、その後新学制によって、名古屋大学に吸収され、名古屋大学文学部になったと記憶しています。